

平成 30 年度 調査研究評価委員会評価結果

平成 30 年 12 月 26 日（水）午後 1 時 30 分から 5 時 30 分 本館 4 階 講堂

○評価委員

氏 名	所 属	職名等
井之上 浩一	立命館大学 薬学部	准教授
津村 ゆかり	近畿厚生局 麻薬取締部鑑定課	課長
◎ 朝野 和典	大阪大学 医学部	教授
福島 若葉	大阪市立大学 大学院医学研究科	教授
三宅 眞実	大阪府立大学 生命環境科学部獣医学科	教授
山崎 裕康	神戸学院大学 薬学部	教授

◎委員長

(五十音順)

○評価基準

評点	研究の必要性	研究の内容	研究の成果	総合評価
1	欠ける	劣る	乏しい	再考すべき
2	低い	やや劣る	十分でない	改善を要する
3	妥当である	標準的である	標準的である	標準的である
4	高い	優れている	標準以上	優れている
5	非常に高い	非常に優れている	優れた成果	非常に優れている

○評価結果

課題 1				
課題名	細菌性腸管感染症及び食中毒に関する研究 新興下痢症起因菌 <i>Escherichia albertii</i> の検査法の開発 (微生物部 細菌課)			
評価項目	研究の必要性	研究の内容	研究の成果	総合評価
結果	3.6	3.8	3.8	3.6
委員 コメント	<p>○新興感染症の病原体を的確に検査できる方法を開発することは、感染症研究の核心部分と思われる。研究を継続し、実際の検査体制の確立が望まれる。</p> <p>○選択的増菌法開発の必要性は、選択培地 (Maheux) で感度と特異度が十分な検出ができないことが前提である。選択培地の感度、特異度は、増菌法と比較して十分か？</p> <p>○研究手法も工夫を繰り返されており、他の細菌の分離にも応用できる技術の確立と思われる。株数を増やして、論文化が期待される。</p>			
担当者 回答	<p>○今後、実検体を用いた評価を進めるとともに、再現性の確認を実施する予定である。</p> <p>○Maheux の論文では選択培地の感度についての検討結果はなかった。また選択培地は特異度は高くなく、夾雑菌の発育を抑制できないが、開発中の増菌培養法は夾雑菌の発育を抑制できるため特異度が高く、有効であると考えられる。</p>			

課題 2				
課題名	ウイルス性呼吸器感染症の研究 アデノウイルス感染症に関する研究 (微生物部 ウイルス課)			
評価項目	研究の必要性	研究の内容	研究の成果	総合評価
結果	3.3	3.0	3.3	3.1
委員 コメント	<p>○尿道炎の患者からアデノ 56 型を初めて検出したのが大安研であり、それを発端として進められている研究である。性感染症であるため検体数が得られにくい、という限界点はあるが、今後の研究継続が必要と思われる。</p> <p>○疫学的な情報収集という意味では評価できるが、得られた情報をどのように社会へ還元するのか明確にすべきと思われる。</p> <p>○当該研究の成果自体は地味と考えられがちである。研究所としてウイルスの同定能力を維持発展させること自体が将来の重篤な感染症対応への備えとなることを、機会を捉えてアピールすると良いと考える。</p>			
担当者 回答	<p>○咽頭結膜熱や結膜炎の原因ウイルスが、性的接触により感染し、尿道炎の原因となる可能性があることを情報発信し、アデノウイルス性尿道炎の認知、検査に繋げたい。</p> <p>○新型アデノウイルスや国内未検出のアデノウイルスを判別できる地方衛生研究所は限られているため、当所で輸入例や変異株等の検出、解析が可能な点についても大安研のホームページを活用して発信していきたい。</p>			

課題 3				
課題名	感染症の予防に関する研究 結核菌分子疫学を用いたあいりん地域における結核蔓延状況の実態把握 (微生物部 微生物課)			
評価項目	研究の必要性	研究の内容	研究の成果	総合評価
結果	4.8	4.1	4.3	4.3
委員 コメント	<p>○当該地区の結核調査、研究は貴重な公衆衛生上のフィールドである。特に分子疫学を用いた解析研究は有益であり、得られた情報は今後の外国人結核の増加や途上国の結核対策にも応用できると考えられるため、継続して高いレベルの研究が期待される。</p> <p>○社会的背景も視野に入れ、感染症対策（地域的）の重点地域における感染動向（人の流れ）の調査が必要と思われる。</p> <p>○地域内の感染伝播状況（クラスター率を指標とした評価）の推移について、当該地区以外の周辺地域でも検討されることが望まれる。また、今後も保健所とのコラボレーションを推進し、総合的な研究の推進が期待される。</p>			
担当者 回答	<p>○2013 年以降、地域での居住歴を記録しており、今後は地域内の発症状況をより詳細に検討する予定である。</p> <p>○地域内の感染伝播状況の推移については、今後周辺地域も含めて検討する予定。保健所との協力は必要不可欠であるため、今後も相互協力のもと研究実施する。</p>			

課題 4				
課題名	食品に含まれる健康危害物質に関する衛生学的研究 ミツロウ中の殺ダニ剤および多環芳香族炭化水素の分析 (衛生化学部 食品化学1課)			
評価項目	研究の必要性	研究の内容	研究の成果	総合評価
結果	3.3	3.5	3.1	3.3
委員 コメント	<p>○我が国においてはミツロウを食品として摂取する機会が少なく、特に優先度が高いとは考えにくい。ただ、特定の食品を信奉して摂取し続ける消費者も皆無ではなく、マイナーな食品だから放置しても良いわけではないと考える。当初は殺ダニ剤をターゲットとしていたところ多環芳香族化合物の存在にも気づいた点は評価できる。発がん性物質の作用には閾値がないとする立場をとるならば、多環芳香族の方が重要と考えられる。</p> <p>○本研究成果を1つの端緒として、より大きな視野で人の健康リスクについて考えたり、関連する材料に発展させるなどが必要である。</p> <p>○(残留汚染物質等については)社会への情報提供方法に留意すべきである。</p>			
担当者 回答	<p>○欧米でミツロウ中の殺ダニ剤検出事例が報告されているが、国内での情報がないため先行的に実施した。併せて得られた多環芳香族炭化水素に関するデータは世界的に少ないため、新規性は高い。今後は分析対象を拡大するなど研究内容を発展させる予定である。</p> <p>○情報提供については、不安を与えないよう予想される健康へのリスクを示す予定である。</p>			

課題 5				
課題名	食品中の残留農薬等に関する研究 畜水産物における残留抗菌性物質と微生物応答との相関性の確認および残留動物用医薬品分析法の改良 (衛生化学部 食品化学2課)			
評価項目	研究の必要性	研究の内容	研究の成果	総合評価
結果	4.3	4.1	4.1	4.2
委員 コメント	<p>○分別推定法に代わる分析法を開発していることは、非常に重要性が高いと思われる。様々な困難が予測されるが、「今後の行政への活用」が望まれる。</p> <p>○薬剤耐性菌の原因のひとつは畜産、養殖における抗菌物質の飼料としての使用である。薬剤耐性菌対策という視点で、試料中の抗菌物質を調査することと、食肉などからの抗菌物質の検出は重要な指標である。多数種類の抗菌物質を検出するためにはバイオアッセイ法は不適切であるので、本研究で開発中の理化学分析法が標準化されることが絶対的に必要と考えられる。</p>			
担当者 回答	<p>○偽陰性の可能性がある分別推定法の代替法として、今後も理化学分析法の開発を推進し、行政に貢献していきたい。</p> <p>○今後は飼料添加物として多用されている抗菌性物質の理化学分析法を開発し、残留実態を調査する予定である。</p>			

課題 6				
課題名	医薬品等の品質確保及び健康被害防止に関する研究 軟カプセル状健康食品の外皮から検出された新規 PDE-5 阻害剤の構造解析 (衛生化学部 医薬品課)			
評価項目	研究の必要性	研究の内容	研究の成果	総合評価
結果	4.4	4.5	4.2	4.3
委員 コメント	<p>○今回の研究で、「輸入薬品については外皮に違法化合物が含まれている可能性がある」ということを指摘した貴重な事例である。</p> <p>○当該健康食品は冬虫夏草含有食品として天然をうたっていたとのことであるが、怪しげな健康食品に作用が不明な薬物が入れている実態の広報が望まれる。</p> <p>○一つの課題を解決するためには、多くの労力を必要としており、そのため一定期間に解決できる課題が制限される状況が心配である。一つのアプローチで複数の課題を解決するような、網羅的なプロジェクトの考案にも取り組まれることが望まれる。</p>			
担当者 回答	<p>○様々な問題に対応できるよう、引き続き情報収集・技術研鑽に努める予定である。</p> <p>○検出事例についてはホームページ上で公開し、作用不明な薬物の危険性について注意喚起を継続していく。</p> <p>○今回は構造解析を当所で、活性評価を他地方衛生研究所で実施したように、それぞれの個性を上手く活用し連携することで様々な課題に対応していく。</p>			

課題 7				
課題名	大気汚染、住居及び職場環境における有害物質による健康影響に関する研究 殺虫剤・可塑剤・難燃剤による子どもの体内汚染と住宅室内空気質の及ぼす影響 (衛生化学部 生活環境課)			
評価項目	研究の必要性	研究の内容	研究の成果	総合評価
結果	3.3	3.1	3.3	3.0
委員 コメント	<p>○測定結果の中で飛び抜けて高い有害物質が無かった場合には、「我が国の一般的な家庭内の汚染状況は心配するレベルでない」ことを示す一つの研究成果となる。分析する者としては問題を発見したい気持ちになりがちであるが、「問題なし」の結果を活用する視点も持つほうが良いと考える。</p> <p>○子供への曝露を対象とした研究は大変重要なものであり、特に実態調査の意義は大きい。尿中データは、比較対照をとる必要があると思われる。</p>			
担当者 回答	<p>○子どもにおける化学物質の曝露、吸収に関する調査結果は我が国において殆どない。今後同様の調査を発展させてデータを蓄積することにより、検出量が低レベルである化学物質については「日常の生活環境下において健康影響がほとんどない」と判断できる根拠資料が得られると考えられる。</p> <p>○各化学物質について、尿中に排泄される代謝物量は、採尿時点または以前における複数の汚染源からの取込み量を反映していると考えられる。尿の対照データを得るには、まず各汚染源を特定し、当該化学物質の曝露が無い環境を設定することが必要と考える。</p>			